

# スポーツ運動学とエメルシオロジーにおける方法論の比較考察

## Vergleich und Betrachtung in Methoden der Bewegungslehre und Emersiologie

キーワード：現象学 生ける身体 間主観的な共同分析 認知的な再-状況化  
Keywords: Phänomenologie, Lebende Körper, Intersubjektive Ko-Analyse,  
Kognitive Re-Situation

武藤 伸司

MUTO Shinji

### Abstract

In diesem Papier vergleichen und betrachten wir Bewegungslehre und Emersiologie. Die Emersiologie ist Andrieu Bernards Forschungsmethode. Es forscht die Emersion des lebenden Körpers. Der lebende Körper ist ein Begriff, der sich auf innere Empfindungen und unbewusste Bewegungen bezieht. Andrieu erklärt die Leistung des Körpers durch dieses Bewusstsein. Diese Emersiologie fehlt den Aufbau pathoser Beziehungen im Vergleich zur Bewegungslehre. Eine Überprüfung, um diesen Teil auszugleichen, ist für unsere zukünftige Forschung erforderlich.

## 1. はじめに

身体が何らかの動きの技術を獲得するとき、我々はその際のプロセスをはっきりと捉えていない。例えば、逆上がりができるようになった瞬間、自転車に乗れるようになった瞬間など、それらの技術の獲得、すなわちコツを獲得する瞬間について、何が起こったのかを詳細に述べることは困難である。ただ一定の動き(技)が成功した結果だけが残っていて、「あ、でき[た]」という過去形としてでしか意識に上らない。も

ちろん技術の習得は段階的であるし、そのプロセスを想起したり反省したりすることはできる。とは言え、コツという身体知<sup>1)</sup>をそれとして獲得した瞬間を明確に意識し、言語化できるようになるのは、常に事後的なものとなる。

だが、練習を積み重ねる中で、目的の運動形態<sup>2)</sup>の輪郭がその都度その瞬間にはっきりしてくるという体験を持つことは疑い得ない。これについては誰にとっても自明であろう。そうでなくては「上手くなる」という認識自体が成立しない。しかしそれは、こうした運動

形態獲得の経過の中で、人は「こんな感じかな」という漠然とした予感とともに試行錯誤を繰り返し、「あ、できそうかも」という予感よりはっきりとした予期を迎えることで、おぼろげながらそのことを認識しているというのが実情であろう。だがこの体験は重要なもので、これらの予感や予期がコツを醸成する<sup>3)</sup>。この臆気ながらも確実に感じとられているコツを道しるべにしてさらに練習を重ねていくと、ある特異点を迎える。その特異点こそが「できる」あるいは「できた」であり、すなわちその動きのコツの獲得という体験となる。この状況は、コツがコツとして結実した瞬間と言える。

こうしたコツの獲得体験の内実を研究する目的を持つ学問がスポーツ運動学であり、現象学はその理論的な背景を支えるものとして用いられている<sup>4)</sup>。上述のようなコツが発生する場面を記述するとき、現象学はそれが単なる経験談や経験則ではなく、コツの認識それ自体が成立する仕組みとして、受動的総合や時間意識の構成プロセスの理論<sup>5)</sup>からそれを明確に説明し得る<sup>6)</sup>。

そしてさらに現象学は、主観的な体験記述をデータとして学問的に研究する方法論でもある<sup>7)</sup>。現象学的還元を用いて自己や他者の運動感覚に肉薄し、その具体的かつ個別的な運動感覚を総合して、特定の運動形態のコツを本質直観するのである<sup>8)</sup>。この方法は、スポーツ運動学において特に借問という実践的な伝承方法とともに用いられ、運動形態の分析や発生を可能にする<sup>9)</sup>。

しかしながら他方で、現象学を理論的な背景にしつつも、スポーツ運動学とは異なる仕方で身体運動における技術習得の内実を明らかにしようとする考え方がある。それがベルナル・アンドリュウの提唱する「エメルシオロジー」である<sup>10)</sup>。このエメルシオロジーとは、「生ける身体のエメルジオンを研究する学」<sup>11)</sup>であり、身体における内的な感覚や無意識的な動きへの気づきを手掛かりにして、身体のパフォーマンスを説明する理論である。つまりエメルシオロジーとは、スポーツ運動学的な理解を用いて換言すれば、「身体運動において無意識的に形成されるコツやカンといった身体知を明らかにしようとするものである」と言い得るだろう。この意味で、両者は探究の

対象と目的が一致していると言える。

だが、探究の対象と目的が同じであっても、両者の間には、その身体運動の体験を明示する方法に相違がある。例えば、スポーツ運動学では借問による地平分析によって対象者の動感を指導者(研究者)とともに分析しようとする方法を採用し、すなわち間主観的な共同分析<sup>12)</sup>を行う。他方、エメルシオロジーでは対象者の運動中に一人称的な視点の動画を撮影し、それをもとに無意識的な運動感覚を「認知的な再-状況化」によって意識化するという方法を用いる。この方法を行うことで、対象者本人に運動感覚を分析させる。それはつまり、客観映像を媒介にした反省的な体験記述を行うということである。

後者のエメルシオロジーは、現象学者であるメルロ=ポンティの身体論を下敷きにし、それを応用したフランシスコ・ヴァレラの神経現象学を用いて理論構築していることから、現象学の理解が基本となっている<sup>13)</sup>。つまり、スポーツ運動学もエメルシオロジーも、理論的な背景が現象学に拠っているという点において共通しているのである。だがそれにもかかわらず、上述のような探究方法においてなぜ差異が生じるのか。探究の原理的な背景を共有しているにもかかわらず、方法論が異なる理由は未だ明確ではない。そしてさらに、これらの方法論の相違は、実際の身体運動における現象を研究する上で、どのような結果を生むのか。これらの問いが、本論考において明らかにすべき課題となる。

以上のことから本論考は、間主観的な共同分析と客観的な映像の媒介による認知的な再-状況化という、スポーツ運動学とエメルシオロジーの両方法論を比較考察する。これらの考察を通じて本論考は、運動形態獲得プロセスに対する研究の多様性と可能性を明らかにする。

## 2. エメルシオロジーについて

日本では保健体育の教員免許を取得するための要件として「運動学(運動方法学を含む。)」の履修が設置されている<sup>14)</sup>が、その運動学の内実はスポーツ

運動学という金子明友によって創設された発生論的運動理論である<sup>15)</sup>。そうした意味で、スポーツ運動学は体育分野において一般的な認知を持つ。他方、エメルシオロジーは、上述のようにアンドリュウが身体論研究のために考案した理論であり、2016年に上梓された彼の著作『その生ける身体を感じる—エメルシオロジー』<sup>16)</sup>によってフランスで認知されるようになった。アンドリュウは、およそ10年前よりフランスで身体をテーマとする著作の刊行が相次いだ時期において、『人文・社会科学における身体辞典』<sup>17)</sup>も刊行しており、フランスの身体論研究においては著名である。日本ではこの理論自体について、スポーツ社会学者の倉島哲をはじめとし、一部の身体論系の研究者が注目している。以上のような実情において、体育、身体の研究領域における両者の重要性がうかがえる。だが後者は日本においてそれほど一般的ではない。そのため我々は、アンドリュウのエメルシオロジーの概要を確認する必要があるだろう。その上でスポーツ運動学との対比を試みることにする。

#### a) エメルシオロジーの原理論

エメルシオロジーはアンドリュウの造語であるが、その原語であるエメルジオンとは、「[「水面下に隠れていたものが浮上して姿を現す」を意味するフランス語の動詞 *émerger* の名詞形]<sup>18)</sup>である。では、この語によって意図されている「隠れて浮上するもの」とは一体何なのか。

アンドリュウによれば、「意識された感覚の内容は生きられた身体によって知覚されるが、この内容は、生ける身体が背後で沈黙のうちに活動した結果」<sup>19)</sup>であるという。このことは、意識における知覚と感覚の現れ方の相違を述べている。前者の「生きられた身体 (*lived body, corps vecu*)」とは、すなわち知覚であり、それは我々に意識されている身体や運動の言語的な表明や理解といった明確な認識を指す。そして後者の「生ける身体 (*living body, corps vivant*)」とは、すなわち感覚であり、それは我々にとって沈黙的、すなわち無意識的なものであり、意識に顕現することなく作動しているという性質を持つ<sup>20)</sup>。つまり、感覚と知覚は認識のレベルが異なっているということであ

る。そしてさらに、感覚が生じて知覚が後に成立するという認識における発生的な先後関係がある、ということも意味している。

このことは、フッサールやメルロ=ポンティの現象学にとっては基本的な理解<sup>21)</sup>であるが、それは単に哲学的な認識論に留まらない。例えば脳生理学者のベンジャミン・リベットは、「事象へのアウェアネスを引き出すには、脳には適切な活性化が最大で約0.5秒間という比較的長い時間続くことが必要」<sup>22)</sup>と述べている。これは、感覚刺激が身体に与えられた後、脳内で神経発火が生じるが、それによって感覚の内容が明確な知覚としての意識へと上るまでに、最大で0.5秒もの時間を要するというものである。この科学的な研究の結果は、感覚として生じる身体運動そのものやその技術が、はっきりと意識される以前に、ほとんど無意識下で生じているという、我々の一般的な認識や体験と合致するものである。このことはまさに、物理的にも感覚と知覚のレベルの相違を示すものであり、かつ本論考の冒頭で述べたコツの獲得の事後性という事態をも示している。これらのことから、アンドリュウがエメルジオンという術語で指し示したかった事象とは、身体(運動)感覚が知覚へと顕現化していくという「意識の働き方の相違とプロセス」であると理解し得るのである。

そしてさらに重要な問題は、身体の感覚が「背後で沈黙のうちに活動」するのならば、どのようにして感覚それ自体を捉え、研究の対象にするのか、という点である。こうした感覚と知覚の本質的な関係において、上述のように我々が明確に言語化できる対象は知覚であり、感覚が非言語的で不明瞭なものに留まってしまうならば、身体に生じる様々な感覚、特に運動感覚の研究は困難なものとなる。しかしアンドリュウは、「われわれの知覚する「現実の」経験が生ける身体の活動から遡及的に構築されたもの…(中略)…生ける身体の活動の事後的な構築物であることをまぬがれない」<sup>23)</sup>のだが、エメルジオンという観点に立てば、「生ける身体の働きに気づかせてくれ、人間および身体エコロジーの不可視の部分にアクセスすることを可能にしてくれる」<sup>24)</sup>と述べている。そしてそこで彼は、「主観的意識に現れるこうした身体イメージ[知

覚)と、生ける身体の活動から直接もたらされるもの〔感覚〕を区別するための研究方法論が必要である」<sup>25)</sup>とも述べている。では、この方法論とは一体いかなることなのか。

## b) エメルシオロジーの方法論

以上のことについてアンドリュウは、前反省的な意識としての生の、直接的に生じている感覚を自己分析するために、すなわち、「活動のただなかであっても主体の意識を逃れてしまう生ける身体の働きを特定する」<sup>26)</sup>ために、以下のような具体的な研究方法を設定し、実行する。それが、小型のウェアラブルカメラを用いた自己分析インタビューである<sup>27)</sup>。

アンドリュウは2013年に、フランス国立サーカス芸術センター(CNAC)の学生を対象に、練習時におけるサーカス・アーティストの身体能力の観察を行っている。そこで彼は、「指導者と学生による熟練したテクニックの開発が、彼らの精神と身体を用いてある知識体系を創造する様子…(中略)…自らを芸術作品として作り上げるべく打ち込んでいる、作業中の身体」<sup>28)</sup>に焦点を当てている。この観点において彼は、事前に美学、身体文化に関する哲学ワークショップを行った上で、現場で練習する学生たちの体にウェアラブルカメラを取り付け、動画を撮影した。さらにそこで録画された映像を対象者に見せつつ、反省的な自己分析インタビューを行い、分析の資料とした。

以上がアンドリュウの実践した研究方法の概要であるが、なぜ彼は運動の映像記録を収集するためにウェアラブルカメラを用いたのか。それは単に通常のビデオカメラで運動を記録することと何が異なるのか。

ウェアラブルカメラを用いて録画するアンドリュウの意図は、このカメラによって「主観的な映像」を取得するためである。カメラは基本的に客観的な視点映像を撮影するもので、事象の外面的な資料となるに過ぎないが、しかし対象者の目線からの映像を撮ることにより、可能な限り主観的な視覚体験に近づくことができる<sup>29)</sup>。こうした特徴を活かすため、彼は事前に「パフォーマンスに焦点を当てるのではなく、運動の

ただなかにある自身の身体に向かうよう」<sup>30)</sup>、学生たちへそれに意識を向けさせる指示を出している。したがってこの方法は、「運動する身体の一人称的な視点」<sup>31)</sup>を学生に意識させつつ、「状況に埋め込まれた主観的視点をとることで、自身の身体活動の痕跡に関心を集中させ」<sup>32)</sup>るためのものなのである。

また他方、この方法は単に対象者だけでなく、研究者の側にとっても特有な意味を持つ。この方法を探ることで、「われわれは、パフォーマーの状況に埋め込まれた身体的行為を共感すること、いわば、これらの行為をみずから生きることによって、より全体的な反省を可能にせねばならない。そうすることで、意図的かつ意識的な行為と、非意図的かつ無意識的な行為を直接的に区別することが可能になる」<sup>33)</sup>。このことはつまり、運動を行う対象者の主観的な意識だけでなく、それに研究者がより深く入り込むための措置でもある。研究者に対象者の主観的な視点を疑似的に経験させ、その現象を理解し易くさせるのである。もちろん研究者自身が対象者本人と同じ体験をすることはできないが、可能な限り類似するパースペクティブを探ることで、事態に関与し易くなるのである。

以上のような内実を持つエメルシオロジーの研究方法において、実際に学生たちは、「認知的な再-状況化(*re-situ*)のなかで、彼らは自身の言葉を用いて行為のプロセスを説明しコメントすることで、自らの行為を言語化できた」<sup>34)</sup>という。例えば、対象者たちは空中ブランコにおいてパートナーとアクロバティックな離れ技を行う際に、「彼女との視覚的なコンタクトをなくすことはありません。…(中略)…でも、自分で意識してパートナーの眼や手を探しに行こうとしてもダメなのです」<sup>35)</sup>と述べている。このことからアンドリュウは、「意志的に情報を探索せずとも、生ける身体は直接的環境内に知覚したアフォーダンスのポイントを求めにゆくことでみずからをエコロジカルに適應される…(中略)…情報処理の全体は注意や精神エネルギーを必要とするものではなく、自律化される」<sup>36)</sup>と述べている。つまり、意志や注意といった知覚的な意識を用いて技を行ったりパートナーの位置や状態を確認したりすることなく、視覚的に盲目的な状態であっても、身体の感覚的なコツやカンによ

て技を成立させている、ということがこの実験方法から明らかになったというのである。

ただ、こうした分析や考察自体は、特に目新しい指摘ではない。現象学をはじめ身体論に関わる研究領域ではこのような現象や認識の特定は枚挙に暇がない。しかし、アンドリュースが驚異的であると指摘し、この方法の有効性を指摘する点は、「学生達は時に、まったく意識していない間に自分の生ける身体が活動していたことに気づくことがあったからだ。彼らは、生ける身体が生み出した動作を見ることができ、その内的な活性化を感じることもできたが、にもかかわらず、生ける身体の活動を意識することはなかった」<sup>37)</sup> というものである。つまりこのウェアラブルカメラによる録画と自己分析インタビューという方法のおかげで、彼らの生ける身体のエメルジオン(感覚)が知覚にもたらされたというのである。そして、「自身の生ける身体の働きを特定することができた」<sup>38)</sup> ことにより、学生たちは非言語的な生ける身体を言語化できたとも主張している。実際、このような体験の言語化によって、さらなる技術的な発展やケガの予防などの反省や分析に活用できたと、アンドリュースは述べている<sup>39)</sup>。

そしてさらにこの方法は、指導者に対しても以下のような有用性をもたらすようである。一般に、運動指導の難しい点とは、「教師達の知識と、個別のパフォーマーたちにおいて身体的に統合された知識は異なったものになる」<sup>40)</sup> というところにある。しかしこの方法を用いれば、映像資料とインタビュー内容のテキストを媒介にして、そしてそれらを前提にして、問題点に対する対話が可能になるとアンドリュースは考えている。運動の技術が生ける身体に棲まうものである以上、非言語的にならざるを得ないが、この方法を通じて問題が言語化、可視化されれば、互いのコミュニケーションは円滑になる。こうした面においても、アンドリュースはエメルシオロジーの活用を主張しているのである。

### 3. スポーツ運動学とエメルシオロジーの比較考察

では、エメルシオロジーの要点をまとめよう。それ

は、以下のことであると考えられる。

- ・原理論…生ける身体(感覚)の存在を認知することの重要性
- ・方法論…生ける身体を意図的に明確な意識(言語化)へもたらすフレームの構築

特に方法論は、原理論において主張される内実を証明し、かつ明確な分析対象へもたらすための具体的かつ実践的な方策として考えられたものであった。この方法論を現象学的に言い換えれば、感覚という知覚の構成契機をありのままに主題化するという方法であり、それは「現象学的還元」<sup>41)</sup> と呼ばれる。現象学的還元の場合は、自然的態度から現象学的態度へ、という態度変更の手続きによって、感覚という内的意識の体験を呈示する。この方法は意識ないし認識に関わることであるから、基本的に思惟的な活動を現象学的還元の主な対象としている。

しかしエメルシオロジーは、機器による動画撮影やインタビューという逐語的な資料を用いており、一人称の主観的な体験に迫る具体的な方策がそれとは異なっている。こうした間接的な方法を用いることがアンドリュースの言う「現象学とエメルシオロジーの橋渡し」<sup>42)</sup> ということになるのであろうが、しかし現象学的還元は内的意識に迫るための行為を規定する理念であるため、その理念に基づきさえすれば、その実行は様々な方法が用いられて構わない<sup>43)</sup>。そのため、そうした意味ではエメルシオロジーの方法論も現象学的還元のある一つのバリエーションに過ぎないと言える。したがって、エメルシオロジーには様々な特徴やアイデアがあるものの、生ける身体という無意識的な活動を意識化し、それを研究データとするための方法論を持つという点では、現象学の理論的かつ方法論的な考え方の系譜に属するものであると言えるだろう。

そして、以上の要点だけ見れば、確かにスポーツ運動学と高い親和性を持つ研究であるとも言える。だが、異なる点はやはり上述の、スポーツ運動学の間主観的な共同分析と、エメルシオロジーの認知的な再・状況化の部分にある。つまり、対象者と研究者の問題に対する「コミットメントの仕方」が異なるということである。

例えばスポーツ運動学の間主観的な共同分析とは、選手と指導者の技術獲得へ向けた営みの中で行われる借問のことであるが、この借問が成立する条件は、選手と指導者の間で「パトス関係系」<sup>44)</sup>が共有できていなくてはならない、という点である。借問は、単に両者の言葉のやり取りではなく、選手の動きに対する生々しい葛藤の「原発生地平」<sup>45)</sup>に指導者が深く潜り込み(潜勢自己運動)、根源的な「感情移入(Einführung)」<sup>46)</sup>が生じることで成立する。これが成立していなければ、指導者は新たな技術獲得に悩む選手の運動感覚の地平に潜む本質規則性<sup>47)</sup>に気づくことができないのである<sup>48)</sup>。そうなれば、そもそも間主観性が成立していないということになり、いくら借問をかたちばかり行っただとしても本来的な意味での対話にならず、無意味な言葉の繰り言にしかならない<sup>49)</sup>。

また、目的を深く共有する当事者同士(現場における指導者と選手)はもちろん、研究者という外側からのコミットメントを行う者にとっても、その一定の深度が求められる。その深度を規定するための要件として、「[「動感に対する直観的な気づき」と「現場に居合わせること」、[「パトス的な関係の構築」]<sup>50)</sup>が挙げられる。つまりこれらの要件を通じて、また満たすことで、両者(研究者と指導者、あるいは選手)が現場における現在進行形の「掛かり合い」<sup>51)</sup>が生じるのである。この掛かり合いなければ、上述の借問のように、本来的な事象そのものとしての運動感覚の発生分析を研究者が遂行し得ないのである。それらの意味で、スポーツ運動学は単なる学問的な知識体系や説明方法なのではなく、技の伝承という具体的な実践そのものを含んだ研究領域であると理解されねばならないのである。

しかしながらエメルシオロジーの認知的な再-状況化という方法は、「生ける身体の内的な活性化を説明するための新しい手段」<sup>52)</sup>に留まる。例えばアンドリュウがエメルシオロジーを「この研究の方法論的な難しさであり、また、面白さであるものは、これらの活性化を言語で表現するためのモーダリティを探究することである」<sup>53)</sup>と述べるように、それはこの非言語的な生ける身体を適切に言語化し、説明的に理解す

るための一方法なのである。つまり、当該の問題を探究するためのプログラムの試行錯誤における、一例に過ぎないということである。

確かに現象学を下敷きにしている以上、千差万別の事象にどのような探究プログラムが適するかという問題は、常にそれに合わせて作り直していくべきものである<sup>54)</sup>。その意味でエメルシオロジーに問題は無い。しかしそれは、上述のスポーツ運動学の内実と理念からしてみれば、身体性の原理を証明し、分析し、説明することはできても、身体運動の発生や伝承という具体的な実践における展開可能性にまで射程は及んでいないのである。スポーツ運動学を基準として比較してみれば、例えば上述の「動感に対する直観的な気づき」、「現場に居合わせること」、「パトス的な関係の構築」の三つのうち、エメルシオロジーは前者二つにのみ関わるものであり、残りの一つに関してはその方法論の目的に組み込まれてはいないようである。エメルシオロジーが身体にまつわる現象の「説明」に留まる限り、スポーツ運動学における身体運動の研究とは、その深度に差異を生じ続けることになる。

#### 4. おわりに

もちろん、これら両者の深度については、エメルシオロジーがスポーツ運動学のような伝承という意図を持っていないから生じる差異であり、感覚の言語化が最重要事項であれば、伝承の観点は必要とされないのかもしれない。しかし現場に携わり、質的研究を行う以上、対象者側への寄与も必要であろう<sup>55)</sup>。つまり、両者の間に互惠関係が築けるか、という問題である。それは本論考における上述の考察の通り、掛かり合いの深さに関わる問題にもなってくる。それが具体的にどのようなかたちのもことになるのかは、現場と対象者に左右されるが、そうであるとしても、アンドリュウだけでなく質的研究を行う研究者の課題として認識しておく必要があるだろう。したがって、エメルシオロジーという新しい研究方法が、アンドリュウが意図した生ける身体への気づき以上の何を提供でき

るのか、その点を含めて我々はこの方法を検証する必要が生じるのである。

実際、筆者は現在のところこの方法を用いてスキー初心者の技術習得のエメルシオロジーを実験している。紙幅の関係上、この実験結果と考察は別稿に譲ることとなるが、多くの問題点が浮き彫りとなった。重要な問題点だけをここで簡単に提示するとすれば、それは、生ける身体の言語化というこのエメルシオロジーの探究プログラムが、体験の少ない初心者には向かない、という点である。特にアンドリュウが提示した方法の一つとして、対象者への自己分析インタビューがあるが、対象者に競技ないし運動に対する十分な知識と経験がないと、そもそも言語化のための言語が選択できないという結果が出た。この問題点に関わる詳細と内実を改めて検証することで、エメルシオロジーの確立と展開を示すことが可能かもしれない。これについては、さらなる研究を要する。

#### 付記

本研究は科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(武藤:課題番号19K20080)の支援を受けてなされた研究成果の一部である。

#### 参考文献

Andrieu, B., *Sentir son corps vivant. Émersiologie 1.* Paris, France: Librairie Philosophique J. Vrin, 2016

アンドリュウ・ベルナル、倉島哲「スペクタクルの背後の身体—サーカス・パフォーマーの生ける身体のエメルジオンを捉える」『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号所収、倉島哲訳、日本スポーツ社会学会、2018年、pp. 39- 53 (Andrieu, B., and Kurasima, A. “The Body Behind the Spectacle: Capturing Emersion of the Living Body of Circus Performers” 『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号、日本スポーツ社会学会、2018年、pp. 25- 38)

ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』下條信輔訳、

岩波書店、2005年

Boëtsch, G., et Andrieu, B., *Le dictionnaire du corps en sciences humaines et sociales.* CNRS Editions, 2006

稲垣諭『リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション』春風社、2012年

金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年

—『身体知の形成 上』明和出版、2005年

—『運動感覚の深層』明和出版、2015年

—『わざ伝承の道しるべ』明和出版、2018年

Landgrebe, L., *Phänomenologie und Geschichte.* Gütersloher Verlagshaus, Gerd Mohn, 1968

松葉祥一、西村ユミ編『現象学的看護研究:理論と分析の実践』医学書院、2014年

武藤伸司「「身体学」の研究課題:身体学という学問体系の構築」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第51号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2016年、pp. 49- 58

—「幼児身体学の概要と課題」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第52号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2017年、pp. 45- 53

—「身体学研究の展開:研究における方法論の構築とその実践」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第53号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2018年、pp. 63- 72

—「スポーツ運動学と現象学の関係を改めて問う」『伝承』第19号所収、伝承運動研究会、2019年、pp. 67-91

佐藤徹『現象学的スポーツ運動観察論』大学教育出版、2018年

浦井孝夫「教育職員免許法施行規則にみる「教科(保健体育)に関する科目」の「運動学(運動方法学を含む。)」の内容についての再確認:シラバス作成に向けて」『スポーツ運動学研究』第26号所収、日本スポーツ運動学会、2013年、pp. 133- 139

山口一郎『存在から生成へ—フッソール発生的現象学研究』知泉書館、2005年

教育職員免許法施行規則：<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=329M50000080026> (2020. 11. 26)

## 注

- 1) これについて金子は「生命的身体のもつ【運動能力】を私たちは〈身体知〉ないし〈動感身体知〉と呼ぶのです。身近な表現を使えば、今ここに居合わせている私の身体がわかり(発生始原の身体知)、私が動くときのコツをつかみ(自我中心化の身体知)、カンを働かせることができる(情況投射化の身体知)という働き全体」(【】内は原文で傍点が付されている。以下の引用でも同様の措置とする。金子明友『身体知の形成 上』明和出版、2005年、p. 2)と述べている。
- 2) これについて金子は「運動形態とは、生気づけられた運動メロディーによって実現される、今この私の運動ゲシュタルトである。それは…(中略)…私の運動感覚能力によってしかとらえられない【意味構造】をもっている」(金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年、p. 7)と述べている。つまり、運動形態とは単なる運動の外面的な形(フォーム)だけでなく、動きの感覚の意味も含む術語である。
- 3) コツについて、金子は黒田亮『勘の研究』(岩波書店、1993年)を引用しつつ「状況判断における〈先読み能力としてのカン〉と、動き方のポイントをとらえての〈習熟形成に関わるカン〉とを区別して…(中略)…後者を対私秘的な身体知としての〈コツ〉として」(金子(2002)、p. 229)理解している。このコツは「「動くことができる」という能力性の地平」(金子(2002)、p. 500)であり、「私はできる(Ich kann)」という「可能性(Vermöglichkeit)」(Landgrebe, L., *Phänomenologie und Geschichte*. Gütersloher Verlagshaus, Gerd Mohn, 1968, S. 139f.)を持った運動習得の展開可能性に関わる様相を含んでいると述べられている。
- 4) フッサー現象学との関係については、特にキ

ネステーゼの概念を金子がマイネルの運動学に取り込んだことによって、決定的なものとなった。金子(2002)、p. 2を参照のこと。

- 5) これらの理論について、山口一郎『存在から生成へ——フッサー現象学的現象学研究』知泉書館、2005年を参照のこと。ごく簡単に言えば、発生的現象学とは、受動的総合と時間意識の能作によって様々な意識(運動やその技に対する意識も含む)がいかにして構成されるのかという問題を研究するものである。
- 6) スポーツ運動学は「発生分析」という点でこれらの理論を用いている。この点について、金子明友『運動感覚の深層』明和出版、2015年、§31(pp. 103- 106)を参照のこと。
- 7) この点について、武藤伸司「『身体学』の研究課題—身体学という学問体系の構築—」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第51号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2016年を参照のこと。ここでの身体学とは、現象学における身体論に特化した研究領域のことである。
- 8) この点について、武藤伸司「身体学研究の展開—研究における方法論の構築とその実践—」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第53号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2018年を参照のこと。
- 9) この点について、武藤伸司「スポーツ運動学と現象学の関係を改めて問う」『伝承』第19号所収、伝承運動研究会、2019年を参照のこと。
- 10) ベルナール・アンドリュウの「エメルシオロジー」について、アンドリュウ・ベルナール、倉島哲「スペクタクルの背後の身体——サーカス・パフォーマンスの生ける身体のエメルジオンを捉える」『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号所収、倉島哲訳、日本スポーツ社会学会、2018年(Andrieu, B., and Kurasima, A. “The Body Behind the Spectacle: Capturing Emersion of the Living Body of Circus Performers”『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号、日本スポーツ社会学会、2018年)を参照のこと。

- 11) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 48 参照。
- 12) このような借問による動感の共同分析を金子は、「潜勢自己運動」(金子 (2002)、p. 527) と呼び、動感の代行能力を重視している。これについては、佐藤徹が端的に「指導者と観察学習者のパースペクティブを一致させることが求められる」(佐藤徹『現象学的スポーツ運動観察論』大学教育出版、2018年、p. 54) と述べている。
- 13) アンドリュウ、倉島 (2018)、pp. 40- 43を参照のこと。
- 14) 教育職員免許法施行規則における「教科(保健体育)に関する科目」に含まれていることは、周知のことである。<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=329M50000080026> (2020. 11. 26)
- 15) 浦井孝夫「教育職員免許法施行規則にみる「教科(保健体育)に関する科目」の「運動学(運動方法学を含む。)」の内容についての再確認～シラバス作成に向けて～」『スポーツ運動学研究』第26号所収、日本スポーツ運動学会、2013年を参照のこと。
- 16) Cf. Andrieu, B., *Sentir son corps vivant. Émergiologie 1*. Librairie Philosophique J. Vrin, 2016.
- 17) Cf. Boëtsch, G., et Andrieu, B., *Le dictionnaire du corps en sciences humaines et sociales*. CNRS Editions, 2006.
- 18) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 50、注2) 参照。
- 19) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 40 参照。
- 20) 上掲書同所参照。
- 21) 感覚と知覚の相違について、武藤 (2016)、p. 50を参照のこと。身体に与えられる五感のような感覚与件は、統握という能動的な志向性によって知覚へと構成される。要するに、感覚に意味を付与することによって知覚という高次の認識へと形成されるということである。知覚の前提条件としての感覚は、意識的に注意が向けられるまで非顕現的なものに留まるということである。
- 22) ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』下條信輔訳、岩波書店、2005年、p. 39 参照。
- 23) アンドリュウ、倉島 (2018)、pp. 42- 43 参照。
- 24) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 42 参照。ここで言われるエコロジーとは、アンドリュウによれば、「環境中のアフォーダンスに対する反応」(前掲書同所参照) という意味であり、要するに身体と周囲世界の相互関係のことである。
- 25) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 43 参照。〔 〕内は筆者が補った。
- 26) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 44 参照。
- 27) 前掲書同所参照。
- 28) 前掲書同所参照。
- 29) この点についてアンドリュウは、「三人称的な視点から撮影されたビデオ画像は、身体活動のおおまかな全体像しか教えてくれない…(中略)…Goproカメラは、録画されるべく意図されていないものを録画することで、スリルに満ちたイメージ、いまだ研究されちない環境、活動の核心をなす瞬間的な姿勢を見せてくれた」(アンドリュウ、倉島 (2018)、pp. 44- 45 参照。) と述べている。
- 30) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 44 参照。
- 31) 前掲書同所参照。
- 32) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 45 参照。
- 33) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 44 参照。
- 34) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 45 参照。
- 35) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 47 参照。
- 36) 前掲書同所参照。
- 37) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 45 参照。
- 38) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 46 参照。
- 39) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 45を参照のこと。
- 40) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 46 参照。
- 41) 現象学的還元のごく簡単な説明について、武藤 (2016)、p. 50、あるいは武藤 (2019)、pp. 80- 81を参照のこと。
- 42) アンドリュウ、倉島 (2018)、p. 49 参照。
- 43) 例えば実際に、松葉や西村らは、看護の現場において現象学の諸理論を用いつつ、質的研究を独自に展開している(松葉祥一、西村ユミ編『現象学的看護研究—理論と分析の実践』医学書院、2014年を参照のこと)。

- 44) 金子明友『わざ伝承の道しるべ』明和出版、2018年、p. 465参照。
- 45) 前掲書同所参照。
- 46) この現象学の術語については、武藤伸司「幼児身体学の概要と課題」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第52号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2017年、p. 46を参照のこと。
- 47) 本質規則性とは、現象学の術語であり、意識の様々な構成における諸能作を指す。例えば、時間構成における過去把持と未来予持の能作であったり、受動的綜合における相互覚起や触発の能作であったりする。特にスポーツ運動学では、運動のコツとカンを指す際にも用いられる。
- 48) 金子(2018)、p. 465を参照のこと。
- 49) あまつさえ、指導者がただただ選手を責めるだけ、選手はただただうなずくだけという、非生産的な、不幸な指導が生じてしまう。この点についても、前掲書同所を参照のこと。
- 50) 武藤(2019)、p. 82参照。
- 51) この掛かり合いの内実について、武藤(2019)、pp. 81- 85を参照のこと。
- 52) アンドリュウ、倉島(2018)、p. 49参照。
- 53) 前掲書同所参照。
- 54) この点について、稲垣諭『リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション』春風社、2012年、pp. 174- 183を参照のこと。
- 55) 武藤(2019)、p. 85を参照のこと。